

大地のきずな

〒156-0055 東京都世田谷区船橋5-28-6 吉崎ビル 東都生活協同組合内
TEL 03-6853-9950 FAX 03-6853-9970 seishoken1@gmail.com https://seishoken.net

発行者：鎌形 芳文
編集責任：常任幹事会

2025年新年号

大地のきずな年頭あいさつ

食糧の生産と消費を結ぶ研究会 会長 鎌形 芳文
(多古町旬の味産直センター代表理事)

食糧の生産と消費を結ぶ研究会50周年を迎えて



あけましておめでとうございます。旧年中は、「食料の生産と消費を結ぶ研究会」(以下「生消研」)の活動と運営に、多大なるご協力いただきましたこと心より感謝申し上げます。

各会員団体の事業とその活動がますます発展されまふこと、また、皆様のご健康とご多幸を祈念申し上げます。

2024年を振り返る

2024年は、「令和の米騒動」と言われる米の不足が顕著

に現れた年でした。政府が発表した2024年6月末の米の民間在庫は、前年より2割も少ない過去最低の156万トンで、2024年の夏は、全国各地で店頭から米が消える事態が起き、スーパーでは外国産米の販売が始まっています。しかし、政府備蓄米の放出はされることなく、前年産米が底をつき、新米を早食いしなくてはならなくなっています。そのため新米の買いあさり米価高騰が引き起こされました。

この米不足の事態は、政府が毎年20万トン以上も生産調整を行って生産を減らし続け、さらに米価調整のための米の買い入れを国が中止したために米価暴落が引き起こされ、米生産農家がここ20年間で3分の1に減ってしまったことだと考えます。ここ20年は米価の乱高下が繰り返され、暴落時に生産者が減り、

高騰時に消費が減ることとなり、米の安定生産が行えていません。米作りの経費は増え続け、この10年で1.9倍になっています。

その結果、米生産農家は2000年には174万戸あったのが2023年には57万戸と、およそ3分の1に減ってしまいました。

農家人口の減少は、日本の主食である米生産に現れたように、他の品目でも減少は続いており、輪をかけて年々気候変動による高温障害により生産が不安定になっているため、今後も多くの品目で国産食料の不足は予想されます。2024年は、そういった状況を象徴する年であったと感じます。

生消研50周年を迎えて

生消研は1974年の生消研結成以来、「食糧の生産と消費を考える」シンポジウムを開催して、生産と消費の共通の課題を明らかにし、お互いに明日からの強い結びつきと産直の前進を積み上げようと、農業・食糧に関する問題提起を行い討議してまいりました。この研究会では、時代の変化に合わせ、全国の先進実践などを取りあげ、その時々の生産と消費の展望を示す役割を果たしてきました。

生消研は今年50周年を迎えます。日本の主食の安定生産ができなくなっている今、農村や消費現場に生消研としてどのようなメッセージを訴えていくか、皆さんと議論していきたいと思

第50回定期総会・記念シンポジウムのご案内

2025年3月15日(土)に生消研50周年記念シンポジウムを西新宿大京ビル2F S201会議室で開催いたします。
新宿区西新宿7-21-3
リファレンス西新宿大京ビル

◆定期総会後のシンポジウムは二部構成で前半は講演、後半は【研究者】1名、【会・生産者(若手・ベテラン)】2名、【生協】東都生協若手職員(予定)1名、【消費者】東都生協常任理事(予定)1名を予定者として「生消研、これまでと今後」をテーマにしてパネルディスカッションいたします。(予定)

また、大地のきずな153号(次号)は50周年特別増刊号として歴代役員の方々の寄稿を予定しております。(事務局)

第44回 現地学習交流集会報告

2024年10月18日(金)～19日(土)、26名で熊本県山都町の行政、有機農業協議会に有機JAS認定事業者日本最多の取り組みの視察と同地域の有機の学校の視察及び現地の有機生産団体の会の視察をいたしましたのでご報告します。
(編集・事務局)

一日目 10月18日(金曜日)

【報告1】
熊本県山都町の有機農産物の栽培について

山都町有機農業協議会会長
堀豊生 様



こんにちは。
山都町有機農業協議会の110名の会員の会長をしております。掘で農業を開始して40年になります。

今日は生消研の研修に山都町を選んでいただいて大変ありがたいと思っています次第であります。私は小松菜を25年ほど作っていて、今年初めて野菜を離乳食



【報告2】
山都町有機農業の紹介
熊本県山都町役場
農林振興課有機農業推進室
室長
飯星俊文 様

昭和40年代からそれぞれの生産者のグループで有機農業が行われてきました。町としても平成15年に、その生産者グループをまとめた形で有機農業協議会というものを立ち上げまして推進をしておりますが国のSDGsの認定を受けまして、また前町長の思いもあり、町を挙げて有機農業を推進しています。

現在ベテランの農家さんと移住による新規就農の農家さんが一体となって、有機農業に取り組まれておりました、この協議会の意見を伺いながら、有機農業を推進しているところでございます。

ただ中山間地特有の人口減少、高齢化による担い手不足、鳥獣被害、耕作放棄地の拡大等々で、農業環境が非常に厳しいのは有機農業に限らず大きな課題です。有機農業先進地として視察等を受け入れているところですが本町の農業者も9割は慣行農業、1割が有機農業というようになっています。更なる有

機農業の普及、面積の拡大に向けて国の補助金等を活用しながら、様々な仕掛けをやっているところですが、結果がなかなか見えてこないというのが現状でございます。

本町の有機農業に係る取り組みをご紹介させていただきます。今後より一層本町の有機農業及び有機農産物へのご理解をいたしまして本日の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお祈りいたします。

【報告3】
有機農業全国No.1の町熊本県山都町の取り組みについてご紹介

農林振興課有機農業推進室
仁田水啓吾 様

山都町は九州の真ん中に位置し北側は阿蘇の南外輪山のほぼ全域を収め、南側は九州脊梁山地に接し標高が高く準高冷地の気候で冬は雪が降ります。

面積は熊本県内で3番目に広い約5444平方km、人口が約1万3000人です。

熊本県内で最も高齢化率が高い町ですが、まだまだ現役で活躍される高齢者が多く、子供からお年寄りまで生き生きと暮らす町です。

山都町のシンボル、日本最大

級の石造りアーチ水路橋「通潤橋(つうじゅんきょう)」は、今から約170年前に水不足に悩んでいた白糸台地と呼ばれる地域一帯に水を送るため、農業用水路の一部として建設されました。今も現役の農業用水路として、地元の農業を支えています。去年9月には土木建造物として全国初の国宝に指定されました。放水時間が限定されているので、見学する場合はホームページで確認してください。

また、九州のグランドキャニオンと呼ばれる秋の紅葉が美しい蘇陽峡など自然豊かな観光名所が数多くあります。

さらに山都町には歴史文化資源が豊富にあります。

豊作を祈願して行われる町最大祭りの八朔祭では、竹やスギなどの自然のものを使って作り上げる巨大な大造り物を引き廻し、町を賑わせます。

また、約170年前から続く人形浄瑠璃の清和音楽は熊本県の重要無形文化財に指定されています。

山都町には魅力的な自然の風景が広がっていて古くから米どころとして知られています。

田んぼの周辺には、豊かな自然の象徴である絶滅危惧種のタガメやゲンゴロウなどの生き物が数多く生息しています。

次に新規就農についてご説明いたします。山都町は次世代の担い手を確保するため、山都町担い手育成総合支援協議会を設立いたしました。

協議会は熊本県の認定研修機関になっているため、研修生は国の補助金をもらいながら研修を受けることができます。

この制度は、山都町で就農される49歳未満の方が対象です。希望する品目や栽培方法などに応じて、1年から2年間、ベテランの受け入れ農家のもとで研修していただきます。

年間を通して多くの方から新規就農についての相談がありますが、協議会では年間3人程度を受け入れの上限としております。

それは農地や住まいの状況を踏まえ、しっかりと研修生のサポートを行い、山都町に安定して就農していただきたいからです。

現在受け入れ農家は有機農家7軒、慣行農家6軒の合計13件です。

受け入れ農家は栽培の指導から、売り先や農地の紹介など、研修生が安定して就農できるようにサポートしています。

研修終了後1年間は受け入れ農家が修了生のほ場を巡回し、フォローを行います。

その後も師匠と弟子のような関係で相談役として関わりが続きまます。

担い手協議会は、農業の相談や移住の受け入れなどを行っている山都の地域しごとセンターと連携しています。

農業と移住の相談をワンストップでできるので、新規就農を希望される方は気軽に相談することができ、今後のライフプランを考えやすい環境づくりに繋がっています。

過去6年間で7名が研修を修了し、現在3名が研修中です。また、協議会の研修制度を使わずに就農される方もいらっしゃいます。

過去6年間の山都町への移住者は全体で178名、そのうち約1割の18名の方が農業をされ、うち12名が有機農業で就農されています。

令和4年度には「有機の学校オーガニックスマイル」という民間の有機農業について学ぶことができる学校が開校いたしました。

ここでは有機農業における理論や施肥設計、農業経営などを勉強することができます。

山都町内外問わず広く受講生を募集しており、今年度は約10名が受講されています。

山都町は環境保全型、地域循環型の農業に取り組んでいます。

中山間地域の気候により、町内全体において、有機農業に限らず、慣行農業においても、農薬や化学肥料の使用量を減らした栽培方法に取り組まれていきます。

有機JASは2年から3年以上、有機的な管理を行った農地について、認証機関による厳しい検査を受け、認証を受けることができます。

山都町は、この有機JASの認証を受けた事業者の数が全国で最も多い「有機農業No.1のまち」です。

次に、山都町の有機農業の歴史についてご説明いたします。山都町の有機農業の歴史は50年以上前から始まっています。

昭和40年代に山都町の各地で集落単位の有機農業の団体が発足いたしました。

昭和52年には山都町で第3回全国有機農業大会が開催されており、有機農業の推進について、農家と農協と行政が協力して取り組んできた歴史があります。

古くから有機農業は特別ではなく、当たり前前の農業として親しまれ、農業の技術や農家の思いは、有機農業を志す次世代の担い手へ今も受け継がれています。

す。

きっかけは、山都町内の旧矢部町農協佐藤組合長が農業による農家の健康被害を懸念して、有機農業を推進したことによるものと言われています。

このような取り組みにより、山都町内外に有機農業が普及していったと思われます。また、山都町は熊本県で推奨されている「くまもとグリーン農業」に先進的に取り組んでいます。

くまもとグリーン農業とは、熊本の宝である地下水と土を農業によって守り育てていくために、化学肥料や化学合成農薬の使用を減らした環境に優しい農業のことです。

また、山都町は令和3年にSDGs未来都市に設定され、有機農業を核としたSDGsの推進に取り組んでいます。

また今まで守られてきた美しい自然環境を次世代に繋いでいくため、今後も環境に配慮した有機農業を推進していくことを決意し、山都町として「オーガニックビレッジ宣言」を行います。

山都町の有機農産物の品目は、お米や人参、里芋、小松菜など多品目にわたり、町全体で年間50品目以上栽培されています。

有機農業で使用する堆肥など

の資材は、栽培する品目や農法の動向に応じてそれぞれ異なります。

また、アイガモ農法や除草機など、お米の除草方法や栽培の方法も様々で、よりよい栽培技術を学ぶため、農家のネットワークで勉強会を開催しています。

有機米は農協から生協や流通会社などに流通しており、野菜は都市部、特に関東や関西、福岡などのスーパーや生協などに流通しています。

また、山都町内には、有機農産物などを中心に取り扱う事業者があり、販路が充実しております。

さらに、道の駅通潤橋では、山都町産の有機農産物、有機野菜を販売しています。

ただ、町内で購入できる店舗はまだまだ少ない状況です。

学校給食について、山都町には小中学校が8校あり、児童生徒数は約750名です。給食はセンター方式ではなく、各学校ごとに給食を作る自校方式に取り組んでいます。

平成29年度から完全米飯給食を実施しております。

山都町では平成6年に小・中学校の母親が、地元の農産物を学校給食に使うように求めた運動が起きました。

それをきっかけに、平成16年

には小・中学校に有機野菜が使用されるようになり、令和3年からは町内の小中学校8校のうち、5校の給食のお米を、山都町産の有機JAS米に変えています。

残りの3校につきましては、元々地元の農家が学校に直接お米を納品されていたことから、農家や保護者の思いを鑑み、地元の生産者の顔が見えるお米を使用しております。

このように、学校給食のオーガニック化については、地産地消の動きからスタートしております。

自校方式のため、学校ごとの有機農産物を使う量は違いますが、子供たちに地元の食材を食べしてほしいと願う生産者と保護者が主体となって取り組みを行ってきました。

次に、有機農業協議会について説明いたします。

平成15年に町内にいくつもあった有機農業関係のグループを一つにまとめた会として、有機農業協議会が発足いたしました。

町が協議会の活動を支援しており、事務局を役場農林振興課の方で担当しています。

会員数は約110名で8つの生産グループと個人会員などで構成されています。

生産グループの中にはJAの

有機のお米とお茶の部会も加入されています。

協議会には5つの部会があり、それぞれ特色ある取り組みを行っています。

子ども野菜塾部会は、都会の子供たちの田植えや稲刈りなどの農作業体験を行っています。

Organic山都部会は、有機農業の栽培技術の勉強会を開催しています。

ブランド米部会は熊本県の農業試験場跡地にて無農薬でお米を生産し、そこでできたお米を、町内の小・中学校へ無償で提供しています。

学校給食部会は、地産地消の推進に向けて、栄養教諭の先生と一緒に定期的に会議を開催しています。

販売促進部会は山都町の有機農産物の認知度向上のためのPRを行っています。

また、山都町の有機農業や有機農産物を町外にPRし、ファンを増やすため、台湾のTSMC半導体工場が立地している菊陽町の方でオーガニックマルシェを開催して、大盛況でした。

有機農業の町として、有機農家の経営の向上や担い手の育成を図る必要があります。

約50年間化学肥料や農薬を減らした農業で守ってきた農地や美しい自然環境を次世代に繋いでいくため、

有機農業を推進します。

そして、その取り組みを拡大し、有機農産物を社会に供給し続けることが重要です。

そこで山都町の有機農業の更なる振興を図るため、令和3年度に山都町有機農業推進計画を策定しました。

有機農業協議会や有機農家、新規就農者、農協、販売事業者、飲食店、消費者などを対象にアンケートやヒアリングを実施いたしました。

それから課題や有機農業の推進に必要な要素を洗い出し、ワークショップでその解決策やアイデアをみんなで出し合いました。

それらを分析した結果、主に次の6つの取り組みが求められていることがわかりました。

一つ目に、後継者不足、担い手不足の課題が挙げられました。

二つ目に、有機JAS認証の申請のサポートおよび認証費用の見直しの意見がありました。

三つ目に、有機水稲栽培への支援です。栽培技術の時間を減らすことで、有機農家の増加が期待されます。

四つ目に、総合的なサポートを行う体制づくりが求められています。

五つ目に、有機農家が相談できる窓口や、販路拡大が求めら

れています。

最後に、学校給食の利用拡大や町内で有機農産物が手に入りやすい環境の整備が必要という意見がありました。これらのことから次の有機農業推進計画を策定いたしました。

施策の内容は次の通りです。

一つ目に、新規就農者、後継者の育成とサポートです。

農業研修制度の活用や山の都地域しごとセンターと連携し、空き家バンクや移住農家の紹介を行います。

農地についても受け入れ農家や農業委員会と連携して進めます。

また、技術指導のサポートを行います。

二つ目に、有機JAS認証の支援です。

有機JAS認証補助事業の補助率の見直しを行い、認証の継続、規模拡大に貢献いたします。

三つ目に、有機米の生産の支援です。

スマート農業などの新技術を取り入れ、除草作業などの労力がかかる部分のサポートを行います。

また有機水稲の栽培体系を確立することにより、新規就農者や慣行農家の増加に繋がります。

販売価格の向上を目指します。

四つ目に、有機農業の拠点づくりです。

有機農業の施策や農家をサポートするサポートセンターを設置し、有機JAS認証支援や技術指導を含めた栽培体系の整備などを行います。

五つ目に、販路拡大です。

有機農業協議会と連携して販売促進に向けたイベントの開催や農産物の商談などを支援いたします。

六つ目に、学校給食の有機農産物の利用拡大です。

有機農業協議会学校給食部会を中心に、有機野菜と有機米の利用率の増加を目指します。

七つ目に、町内での有機農産物の販売、利用拡大です。

道の駅に有機農産物コーナーを設置し、町内で有機農産物が購入できる環境づくりを進めます。

最後に、有機農業の町山都町のPRです。

就農イベントによる担い手の募集、SNSやPR動画などを活用し、有機農業の町としてPR活動を行います。

この計画により、山都町の有機農業の更なる振興を図ります。

次に、国のみどりの食料システム戦略の取り組みについて説明いたします。

みどりの食料システム戦略とは、持続可能な食料システムの構築に向けて農林水産省が定めた方針のことです。

山都町ではオーガニックビレッジとして、有機農業の推進のため事業を実施いたしました。令和4年度と令和5年度の取り組みの一部をご紹介します。

有機農業の技術の向上を目的に、新規・若手農家を対象とした有機農業の技術講習会を開催いたしました。

次に、有機農産物の品質や味、栽培技術の向上と栽培体系の確立を図ることを目的として、山都町の有機野菜の成分を分析し、その結果をもとに講習会を行いました。

次に山都町の大萱（カヤ）などの地域資源を活用した堆肥が作れるよう有機の堆肥づくり講習会を開催しました。

次に有機農家や有機面積の拡大のため、慣行農家観光課向けにおいしい美味しいお米づくり作りをテーマに講演会を実施しました。

次に関東と関西で開催された展示会と商談会に出展し、新たな市場開拓を行いました。

次に道の駅「通潤橋」で有機農産物の販売促進のPRイベントを開催しました。

次に学校給食ではホテル日航熊本様にご協力いただき、小中学校の栄養教諭、調理師と、有機野菜を使った給食メニューを開発しました。そのメニューは

オーガニック学校給食週間で提供し、合計15品目の山都町産の有機野菜を使用しました。学校給食の時間に有機農家や栄養教諭、シェフからのメッセージ動画を流し、「有機野菜を使った給食をたくさん食べて元気に育ってほしい」という思いを伝えました。子供たちからは「有機野菜はとても美味しかった」と大好評でした。

山都町では普段から地産地消を重視した給食が作られ、有機野菜もその中で提供されています。今回はイベントという形で実施したことで、子供たちや保護者も有機野菜について知る良い機会になったと思います。

次に本年度の取り組みについて説明いたします。

有機農業産地づくり推進事業で地域資源を活用したバイオ堆肥の検証事業や流通プラットフォームづくり、小分け業務構築事業などを実施しております。

また、今年度から飛躍的な拡大産地の創出の事業も取り組んでおり、有機米の技術向上や利用の拡大を目指して、計画策定

や有機米サミット実施などの事業に取り組んでいるところです。次に、町独自の取り組みとして、有機農業の支援について説明いたします。

有機JASは毎年更新する必要があるため、面積に応じて手数料がかかります。

山都町の生産者は平均で年間6万円程度の経費がかかっています。

そこで新規は10分の10、継続の方には10分の8の経費の補助を行っています。

また有機JAS面積が増えた場合は、10アール当たり1万2000円の上乗せを行っています。

さらに、有機農産物の貯蔵、流通に係る機械導入や設備整備の支援の方も行ってまいります。

また、山都町有機農業サポートセンターを開設し、有機JASの申請や栽培技術などの相談対応やアドバイスなどを行っています。

さらに、有機米の生産の支援として、アイガモ農法に必要なカモ代や餌代などの経費の補助も行ってまいります。

また、水田の除草のためアイガモロボットやフィールドマイスターなどの実証実験も行ってまいります。

持続可能な農業を推進するた

め、堆肥の生産・利用に必要な工事や機械の導入の補助を行っています。

また、学校給食の有機農産物の利用拡大のため、一般米と有機米の差額の負担や、有機野菜の購入費などの支援も行ってまいります。

50年以上前から有機農業に取り組んできた山都町では、有機農業を核としたSDGs未来都市に選定され、推進計画を策定して様々な取り組みを行っています。

その成果として、山都町の認知度は少しずつ高まってきているとは思われます。

これからも山都町の有機農業の取り組みを発信し、PRしていきたいと思っております。

また、推進計画の策定時から、有機JASの事業者数や面積は増加しています。

ただ、今までの栽培方法から変えるリスクや手間などから、慣行農業から有機農業への転換はわずかにとどまっております。

そのため、低コストや省力化、そして環境に優しい農業をポイントとして、更なる推進

に取り組んでいきたいと思っております。

また、現在の有機農家は60代が最も多く、60%近くが後継者がいない状況です。

これから先を見据えると、担い手不足はさらに深刻化していくと思われま

す。これらの課題の解決に向けて、今後も生産者や関係機関と協力しながら、有機農業の推進に取り組んでまいります。

本町の取り組みが皆さんの有機農業推進の一助になれば幸いです。

■講義終了後に原田副会長の玉ねぎと里芋等の有機栽培の圃場見学をいたしました。



二日目 10月19日(土曜日)

オーガニックスマイル有機の学校にて講義を受けました。

【報告4】

有機農業は科学的に誰でも楽しく新規就農できる

オーガニックスマイル

副理事長

鳥越靖基 様



と音楽を奏でる」というテーマで僕は生きております。

2011年の震災をきっかけに、持続可能な豊かな社会は音楽だけでは実現できないと感じ、食べ物をスーパーで買うという「誰かにしてもらっていた人」を、もう一つ進んで自分で作る人生にしたいと思いがあり、インターネットで検索したら、有機農業日本一の山都町と出会ったので行きたいと思いバンドメンバーと山都町に行きました。

熊本県山都町は、緑に勢いがあり農地や山の緑に大きなエネルギーを感じ、私が望んでいる有機栽培で栄養価が高い野菜と農村の環境がとてもよく移住を決めました。

今はYASKIFARMという名前でも有機野菜の生産と音楽をしながら、新規有機農業者の育成をしております。また、有機農業を普及するにあたって教える側がとても少ないためインストラクターの育成、オーガニックスマイル有機の学校の先生も同時にやっております。

その他にも小中学校の学校給食関係者にも食育の活動を行っており、有機農業からは子供たちや保護者に伝えることがたくさんあるのだから感じております。

このオーガニックスマイル有機の学校は、山都町の紹介もあり全国からたくさんの方が来ます。その生徒が学びたい野菜と一緒に作り、同じ野菜でも畑

によっての違いや環境、地質による違いを実践を通じて、基本を学んでおります。その中で、疑問に思ったことを、今までのなんとなくの感覚だけで指導するのでは成功に繋りにくいので、学校では、ちゃんと科学的視点や数値化、論理的な部分を用いた、小祝先生のBLDF理論をもとに栽培の指導をしております。全国では、この科学的視点や論理的に教えることが少なかったのでは有機農業が全国で増えなかったのだと考えます。

国は2050年まで有機農地の割合を、25%の目標のみどりの食料戦略を目標に掲げております。そのためには、たくさん有機農業者を目指す必要があり、有機農業を普及しなければなりません。有機農業を通じて、全国の輪を広げていき、地域ごとで課題を解決するのではなく、全国の皆さんと一緒に解決を出来たらなと思っております。そのためにも有機農業に理解をして頂ける方を広め、有機農産物25%を目指し、この山都町から発信していければと思っております。

【報告5】

環境汚染・健康被害と有機農業

オーガニックスマイル

副理事長

くまもと有機の会専務取締役

田中誠 様



の応援もあって、何とかものになってきましたが、その頃はまだまだ勘や経験に頼っていたように思います。

理想を求めて有機農業を始める人たちが、現実との壁(農業で食べていく)にぶち当たりやめていく人たちが沢山見てきました。

20年ほど前にBLDF理論の提唱者小祝政明さんとの出会いは、有機農業を化学的に論理的に取組めるきっかけをもらいました。ようやく有機農業を伝えていく為の理論と実践での経験も積みあがってききましたので、誰もが再現できるような技術・理論といったものを学ぶ場所が必要ということと、有機栽培で困ったときに相談できる場所や人を育成することも必要だと考えました。

例えば普通の農業普及員さんに相談しても、いやもうこれにはこのような農業をまいてとか、対処療法としての答えしかなかったり、有機的な解決方法が見つからないことが多い現実でした。

例えば病害虫にどうしてやられてしまうのか?やられないようにするためのメカニズムは、どうなっているのか?質問しても答えられないことが多いと思います。

原因がわからないと根本的な解決ができないです、そういったものをしっかりと学ぶということが大事だろうということ有機の学校を作ることを進めたのです。現実の学校の運営は厳しいです

学校運営していくには、本当にいろんな方々の応援がないとできないですね、国が有機農業を本気で25%まで拡大しようと思うのなら、このような有機の学校事業をもっと強く応援してもらいたいですね。

東京大学の鈴木先生のお話では日本の食料自給率は38%どころか、肥料や種などもほとんど自給できない日本では9%もないとか、京都大学の篠原先生の話になると、エネルギー自給率まで考えたら日本の自給率はマイナスとの話もあるように、やっぱり食料安全保障の問題はオールジャパンでやらないとですね。

今日東京から皆さん来られたけど、熊本の問題とか関東の問題じゃなくて、オールジャパンとしてこの日本の食料問題とか環境問題をどうにかしていくんだ、そのために繋がっていくためには？と言った議論をしていかないといけないと思うんですよ。

だから私、今日来ていただいた

たのは非常にありがたいけど本当はそう思った思いを繋いで行きたいと思いますので、今後共どうぞよろしく願います。

そして有機農産物はミネラル&高品質と多収穫の時代へ

日本科学技術省食品分析調査では、ほうれん草・人参・みかんで1951年代と2000年代を比較すればビタミンや鉄分等ビタミンミネラルが減っています。

昔のほうれん草、ビタミンAの8000mgあってビタミンC1500mgあって、鉄分は13mgありました。

今2000年に入ってからではビタミンAが700mgになって、ビタミンCが35mgになって、鉄分は、ほぼ無いに等しくなっています。

もうこれは我々が絶対農業者も勉強しなければいけないのは、植物に対してミネラルがどういう働きがあるか。そしてそれがひいては人間に対して、どういう影響があるのかを学ぶべきなんですよ。

そうすると、我々が野菜を作るときにどう土作りをしなければ食べる人の健康を支えられないというかですね。

健康を支える野菜の栄養が日

本に栽培されていないっていうのが、これね、非常に重要です。有機農業には長所と短所があります。

長所は、やっぱり有機物を使うことによって、野菜が実は元気になるってことです。

短所は、有機物を入れることによって、腐敗してしまう。要するに有機物っていうのは、例えば大豆、大豆が発酵したら味噌醤油なんですよ。これは体にいいわけです。ただ、大豆が腐敗したらどうなりますかね。身体には良くないものですね。有機物っていうのは、発酵もするけど、腐敗もしちゃうんですよ。

これ聞くとそうだねっていうふうになるんだけど、だから堆肥化したり、ぼかしを作ったりっていう話に有機物はそうなるんですよ。それが長所と短所です。

その土地の水の状況、あとに入れる肥料によってとも環境が変わるんですよ。だから有機農業の難しさっていうのは、良くも悪くもなるんですよ。

正しい有機農業で有機の発酵したアミノ酸みたいなのをきちんと吸ったら、びっくりするほど元気なんです。例えば人参の栽培では慣行栽培で大体3tとか言われているのですが有機栽培で4tはほしい収穫できる

ようになったんですね。そうすると消費者にもある程度リーズナブルな価格に出すことができませんよ。

お米の有機栽培では、今まで5俵〜6俵しかに取れなかったのに8〜9〜10俵というふうに取りれるようにしていくと、それが1haが10haになってくるとすごい違いになります。

そういったことで何とか日本の食料を有機でも支えられるようにしていくことで今取り組んでいるわけです。

中身(栄養価)ですが自己満足的になりがちです。第三者機関できちっと分析をしてもらいましょう。

ほうれん草で比べてみると、きちんと有機的肥料設計をして、できたのは美味しく栄養価が高い数値ができてます。

そのようなことをどんどんいろんな品目で証明をして、コンテストに出して、表彰されることによって、中身もいいのができていくってことを証明していくことが大切である。

最後のまとめですが日本は大変な時代を乗り越えて、経済成長し、経済的な豊かさを手に入れました。

ただそれと引き換えに、失ったものも少なくないようです。本当に大切なものを見極めて、

使い切るのではなく、大切なものを未来に残し繋いで行くかを真剣に考えていかなくてはなりません。

本日はありがとうございました。

★この後有機の学校での西田講師の実際の授業に参加しました。



【報告】

BLOF理論での有機農産物の
稲作栽培について

J A東とくしま
西田聖 様



有機栽培を進めるには、まず
除草剤を中止することから始め
ます。

田んぼでの定植（田植え）で
稲の苗は、水田に5本くらい植
えます。稲が成長して育ちどん
どん「分けつ」をします。

出穂期になると稲の本数が多
く揃ってることが見てわか
ります。

化学肥料所謂アンモニア態窒
素や硝酸態窒素で稲を育てると
生育が疎らでバラバラなんです
が、有機質の肥料だと生育にバ
ラつきがなく稲の長さが揃って
いるんですよ。だから、化学肥
料で育った稲は生育がバラバラ
でお米の登熟が揃わなく粒ぞろ

いが悪い。

有機栽培だと生育が揃ってい
るため一本の稲に平均的に（規
則正しく）粒がついているため、
（効率が良く）倍以上の収穫量
をあげる可能性を
秘めております。

そのために、土
壤改良が必要とい
うことですよ。そ
のためにも現状の
土壌分析が必要で
す。

とくに水田では
ですね、カルシウ
ムとマグネシウム
で調整しているつ
ていることが現実
なんです。

微生物が分解し
やすいカキ殻石灰
有機石灰とかで、P
Hを6.5以上、7弱
にあげる必要があ
ります。水田はも
ともと酸性土壌な
ので、微生物によ
る分解が非常に分
解しにくい状態で
す。

我々は稲刈り直
後に、稲藁を分解
するため石灰を入
れて、水田をずつ
と水を張っていく

と、還元状態になり、だんだん
酸性化しPHが下がってきます。

だから、毎年牡蠣殻を入れて
PHを上げる目的でということ
で、大体PHを1%上げるのに



一般的には、資材を100キロ
ほどいれましょう。慣行栽培の
方は誰も石灰をいれてないん
ですよ。

また、一般的な石灰は、マグ
ネシウムの配合量がめちゃめ
ちゃ低いんですよ。一般的な石
灰はマグネシウムの含有量は
20%もないんですよ、カキ殻
石灰を単体ですと、大体20キロ
中、含有量が45%以上あると思
います。ですので商品を比べた
らよいと思います。

そこにね、苦土も一緒にいれ
るんですよ。そうするとマグネ
シウムが吸収しやすくなります。

このようにBLOF理論の有
機栽培法は理論が大事で、上
手に栽培すると粒ぞろいの良い
高品質で多収穫が期待できるん
です。



現地学習交流会研修の参加者から寄せら
れた感想・アンケートから

1日目

①山都町の研修・意見交換について

・山都町の町全体のビジョンの中に有機農業が入ってい
て町も後押ししてくれるのが素晴らしいと思います。

②有機農産物圃場研修について・生産者のリアルな現
状を知ることができ、今有機農業に取り組む際の課
題などがよくわかりました。

2日目

①オーガニックマイル（有機の学校）研修視察について

・副理事長の方がとても楽しく学校を運営されており、自
身も楽しみながら、人材育成、地域活性に取り組んでい
らっしゃるのがよく伝わりました。山都町の強みのひと
つだと思いました。

②くまもと有機の会視察について

・有機でも多収穫になる理論を学ばせてもらった